

令和 4 年 5 月 25 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21920

研究課題名（和文）イスラーム世界における『医学典範』注釈の展開と意義

研究課題名（英文）Development and Significance of the Commentaries on the Canon of Medicine in the Islamicate World

研究代表者

矢口 直英（YAGUCHI, Naohide）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・特任研究員

研究者番号：30882568

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、イブン・スィナー（1037年没）の『医学典範』の受容を解明するため、その注釈書のうち3点を主要な資料として、それらの間および注釈書以外の文献との間で、比較分析を行った。

注釈者たちは『医学典範』を医学書として、またイブン・スィナーの思想体系の一環をなす哲学書として読み、相互に参照や批判を行って、医学研究を活発に続けていたことが明らかとなった。一方で、その他の伝統と比較すると、注釈者たちによる医学や哲学の理解にはイブン・スィナーの影響があるが、彼らは必ずしも従順ではなく独立した議論を行っていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は『医学典範』の注釈書の研究を通じて、『医学典範』を改めてイスラーム医学の歴史上に位置づけることを目的とした。その注釈書を別個に取り上げてその思想や特徴を明らかにする研究は既に行われていたが、本研究は『医学典範』を中心として成立した一連の注釈書を包括的に扱い、『医学典範』およびその注釈書の実態と、それらの歴史的意義の解明を目指した点に学術的意義がある。『医学典範』やその注釈書はさらなる研究を要するが、本研究はその端緒として有意義である。

研究成果の概要（英文）：This study was focused upon three commentaries on it and read them making a comparison between them or between them and other medical treatises, in order to elucidate the reception of the Canon of Medicine written by Ibn Sina (d. 1037).

The result is as given below. The commentators read the Canon as a medical book and as one of the philosophical books of Ibn Sina, which formed a part of his philosophy. Referring to and criticizing each other, they continued lively the study of medicine. On the other hand, when compared with another tradition of treatises on medicine, the commentators were influenced by Ibn Sina in their understanding of medicine and philosophy, but they were not necessarily obedient to him and independently argued.

研究分野：イスラーム医学史

キーワード：イスラーム医学 イスラーム哲学 イブン・スィナー 『医学典範』 ファフルッディーン・ラーズイー イブン・ナフィース クトゥブッディーン・シーラーズイー イブン・ルシュド

### 1. 研究開始当初の背景

イスラーム世界における医学（以下、イスラーム医学）は、9世紀のバグダードでフナイン・ブン・イスハークに代表される翻訳者たちがヒポクラテスやガレノスの著作をアラビア語に翻訳してから発展を始める。20世紀までの通説によれば、イスラーム医学の発展は11世紀のイブン・スィーナとその主著『医学典範』で頂点を迎え、その後の医学者たちは注釈書と要約書の執筆に明け暮れ、独創的発展を示さなかった。たしかにアラビア語の文献録を見ると、12世紀以降には『医学典範』の派生文献、つまり注釈書や要約書、またこれらに対する注釈書などが大量に生み出されている。しかし、多くの注釈書や要約書が作成された事実は『医学典範』の重要性を物語っており、これらはこの著作が読み続けられた地域や時代における医学の実態に関する重要な資料である。それにもかかわらず、注釈書や要約書に高い価値が認められなかったこと、12世紀以降のイスラーム世界では科学や哲学の営みが下火になったと考えられてきたことなどの理由から、イブン・スィーナ以後の医学は研究者の目が向けられにくく、『医学典範』の注釈書と要約書は研究が遅れていた。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、イスラーム世界においてイブン・スィーナの『医学典範』がどのように受容されたかを解明し、その後の医学に与えた影響を調査することである。主要な資料として『医学典範』に基づいて成立した注釈書を取り上げ、『医学典範』自体の内容も踏まえた上で、これら注釈書における記述や思想の分析を中心におき、『医学典範』と諸注釈書の間で比較検討するとともに、『医学典範』とその派生文献がその後のアラビア語医学文献に与えた影響の解明を目的とした。

イスラーム医学において支配的な影響力をもったと言われる『医学典範』がどのような経緯で普及したのか、またその受容者たちはどのような価値をこの書物に見出したのかを様々な観点から明らかにすることを目指した。

### 3. 研究の方法

本研究ではイスラーム世界における『医学典範』の重要性を把握するため、まずその注釈書や要約書などの情報を収集し、その派生文献のうち特に重要視された12～14世紀のファフルッディーン・ラーズィー、イブン・ナフィース、クトゥブッディーン・シーラーズィーによる注釈書を中心的な資料として、それらの記述の比較分析から、『医学典範』の受容史の解明を目指した。『医学典範』の注釈書は少なくとも18世紀初頭まで大量に執筆されたが、それらの全てについて検討することは現実的ではないので、分析の対象を上記の初期の注釈書に限定した。

それらの分析においては、注釈者たちが『医学典範』の注釈書を執筆した背景に着目し、これらの注釈書が原典である『医学典範』のどの側面を重視したのか、原典に対してどのような態度を取ったのか、どのような読み手に向けて書かれたのか、原典の記述からいかなる発展があるのかを明らかにすることを試みた。それと同時に、注釈書間の相違や影響関係を探るため、各注釈書を比較し、原典に対する態度の違いを読み取って、『医学典範』の評価の理解に繋げた。

#### 4. 研究成果

本研究を通じて、イブン・スィーナーの『医学典範』の受容とその注釈書における扱いについて、以下のことが明らかとなった。

##### (1) 『医学典範』注釈書の哲学書的傾向

『医学典範』注釈書は多数の学者たちによって執筆された。最初期の注釈者の一人としてアシュアリー派神学者ファフルッディーン・ラーズイー（1210年没）がいるが、彼は医者として活動していないにもかかわらず後世の医者たちの人名録に記録されているなど、医学書の注釈者としては異質な人物である。彼の注釈書は『医学典範』の難解な箇所についての問題点を「論題」として整理し、それらの解釈や解決策を与えている。その後の注釈者たちは、少なくとも本研究が分析対象としたクトゥブッディーン・シーラーズイー（1311年没）までの注釈者は、彼が整理した論題を軸に各々の議論を組み立てている。この点から、ラーズイーの注釈書が後代の『医学典範』注釈書に一定の方向性を与えたと想定される。

ラーズイーが語る論題には哲学的な問題が多く含まれている。彼の注釈書が『医学典範』第1巻の前半で終わっており、『医学典範』第1巻第1部は医学の定義や元素といった哲学的内容の記述が中心となっていることも理由として考えられるが、ラーズイー自身が序文で語る内容と照らし合わせると、哲学的な難点の解決が彼の注釈書の主要な関心事であったと考えられる。さらに、後代の注釈者たちがラーズイーが整理した哲学的論題に熱心に取り組んでいることを踏まえると、『医学典範』という医学書から哲学的議論が見出されていると言える。ラーズイーなどの注釈者たちは『医学典範』をイブン・スィーナーの思想体系の一環として扱い、『治癒』などの哲学的著作における見解と整合させているのである。

##### (2) クトゥブッディーン・シーラーズイーの高い引用頻度

シーラーズイーの『医学典範』注釈書についてその結末部分を分析すると、そこには各種医療倫理書からの長大な引用が並んでおり、この引用部分とそれに続く著者自身の医者に対する助言はシーラーズイーの医療倫理書である『医学と医者が必要であることの証明』と同一であることが分かった。この結果、この医療倫理書の全体がこの注釈からの再編集であるということが確定した。またこのような医療倫理に関する文章を本来無関係な『医学典範』注釈書に統合しているのは、この注釈書をもって医者に必須の総合的医学書を作成する目的があったからだと考えられる。

一方で、シーラーズイーの『医学典範』注釈書の大部分が先人の諸著作からの引用であることが判明した。これは既に述べた医療倫理書に限らず、先行する『医学典範』注釈書も含まれている。本研究代表者が発見したものでなく、研究シンポジウムの際の情報提供によれば、大部分の内容が明確な指示なしで他者の説明を再現したものである。そのため、シーラーズイーの注釈書を参照する際には一定の注意が必要であることが判明した。

なお、シーラーズイーの注釈書の写本とラーズイーの『医学典範』注釈書の校訂版とを比較すると、ラーズイーの校訂版には欠けているが、シーラーズイーと他の著者による注釈書においてラーズイーの発言として伝わる議論の存在が判明した。ラーズイーの注釈書は後代の注釈書の基礎となっているため、この議論は校訂版で参照された写本伝統から失われたか、他の場所でラーズイーが語ったものと考えられる。そのため、これら注釈書の伝統は広く写本資料を検討すべきであることが分かった。

##### (3) 『医学典範』注釈書と他の医学書との違い

『医学典範』注釈書とイブン・スィーナーの伝統の外にある医学書との違いを明らかにす

るため、イブン・ルシュド(1198年没)の医学書を資料として、両者の内容を比較した。イスラーム医学者の多くはガレノスの見解に従って、思考や記憶、五感、随意運動に当たる魂の精神的能力の起源を脳と見做す。しかし、哲学者たちはアリストテレスに倣って、それらの起源を心臓と考えている。『医学典範』およびその注釈書ではこの説を採用しており、その伝統の外にあるイブン・ルシュドも同様である。共にアリストテレス主義哲学者であるイブン・スィーナとイブン・ルシュドはこの点で共通しているが、その取り扱い方が異なっていることが分かった。

イブン・スィーナは『医学典範』においてこのような哲学的問題の論証を医学者は行わないよう助言して、医学と哲学の領域を区別している。しかし、注釈者たちはその指示に背き、イブン・スィーナの哲学書を根拠として引用しつつ、それらの能力の起源が心臓であるという論証や証明を行う。ただし彼らは、医学者によって能力の媒介とされる精気をその論証や証明の鍵概念として用いており、これは彼らが典拠としたイブン・スィーナの思想に影響を受けたものである。一方イブン・ルシュドは『総論の書』などにおいて、この問題は医学者が取り扱うべき問題と述べて、身体に内在する熱に基づいた論理によってその起源が心臓であることを証明する。両者は結論こそ同じであるが、このような哲学的問題に対する態度が異なること、また証明や論証の方法が異なることが違っている。そして、イブン・スィーナ本人の思惑とは異なり、『医学典範』注釈書は哲学的な問題に踏み込んでおり、医学者の立場からそれらの問題に取り組んでいることが明らかとなった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 Naohide YAGUCHI	4. 巻 3
2. 論文標題 Missing Account of Fakhr al-Din al-Razi? A Note on the Text of his Commentary on the Canon	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 イスラム思想研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000990	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 矢口直英	4. 巻 3
2. 論文標題 14世紀イスラームの医学観：『医学と医者が必要であることの証明』翻訳(3)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 イスラム思想研究	6. 最初と最後の頁 111-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002000996	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 矢口直英	4. 巻 53
2. 論文標題 14世紀イスラームの医学観：『医学と医者が必要であることの証明』翻訳(4)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 慶應義塾大学言語文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 311-328
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 矢口直英	4. 巻 4
2. 論文標題 ラーズィー『医学典範難点注釈』「第1部」翻訳(1)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 イスラム思想研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 矢口直英
2. 発表標題 クトゥブッディーン・シーラーズィー 『医学典範総論注釈』内の引用
3. 学会等名 ギリシア・アラビア・ラテン哲学会第5回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 YAGUCHI Naohide
2. 発表標題 Quotation in Qutb al-Din al-Shirazi 's Commentary on the Canon of Medicine
3. 学会等名 International Qutb al-Din al-Shirazi Symposium (On the Occasion of the 710th Anniversary of His Death) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢口直英
2. 発表標題 『医学典範』注釈における哲学的問題
3. 学会等名 日本オリエント学会第62回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢口直英
2. 発表標題 医学者は哲学的探求を行うべきか？イブン・スィーナールとイブン・ルシュドにおける主要器官問題
3. 学会等名 ギリシア・ローマ・アラビア医学哲学研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

矢口直英「哲学書としての『医学典範』：ラーズイーの『医学典範』解釈」  
『イスラームの内と外：鎌田繁先生古稀記念論文集』（仮）  
ナカニシヤ出版、2023年出版予定。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------